

序章 転換点としての2010年(要約)

中川 雅彦

2010年に、後継者といわれる金正恩が公の席に姿を現した。しかし、朝鮮側の公式メディアは後継問題そのものに言及することはなく、この人物が後継者であるとも述べていない。本研究は朝鮮民主主義人民共和国における後継者問題について、その後継者が引き継ぐものに焦点を当てるものであるが、まずは、その議論に先立って、そもそも後継者問題に関する基本的な情報の真偽を検証しなければならない状況にある。

現在の最高指導者金正日が金日成の後継者に決定したのが1974年2月13日であったことは当時秘密にされていた。この決定の伝達方法は、意図的に少数の人々に曖昧な形で伝達することから始まって段階的に情報を明確にしていくという特異なものであった。

金正恩の場合、最初の報道は2009年1月15日に聯合ニュース(韓国)であり、次に、韓国側で「親北的」といわれる月刊誌『民族21』6月号の特集であり、また、中国の『環球時報』、日本の新聞での報道に加え、一部の在日朝鮮人総聯合会の関係者に対して平壤から「後継者は血縁者である」ということが伝達された。このように外信報道や在日朝鮮人組織を利用した段階的な伝達方法は金正日の場合と基本的に共通しているといえる。

金正恩は公の席に姿を現してから、金正日の軍隊、企業などの現地指導にたびたび同行するようになった。2010年は、党内で金正日から金正恩への権力移譲の準備が始まった年であり、金正恩が公の実績作りに動き出した年であるといえよう。今後、徐々に、金正日の権限が金正恩に委譲されることになるであろうが、金正恩が最終的に引き継ぐのは政治理念や党組織だけではなく、国家の現状に関する責任も引き継ぐことになる。本研究では、政治理念や党組織の問題は第1章で、対外関係、国内政治、対外経済関係などの現状については第2章以降で扱うことになる。